

編集後記

『企業家研究』第20号は、加護野忠男氏によるご寄稿「日本企業の全員経営―現場の企業家研究に向けて―」と、沢井実氏による「私の企業家研究―オーラルヒストリー事始め―」を中心に、FES便り（「企業家に聞く」）におけるオンラインセミナーの報告（SAMURAI TRADINGの櫻井裕也様）、および5本におよぶ充実した書評によって構成されています。

加護野論文では、企業家研究において、著名な経営者やトップマネジメントにばかり注目するのではなく、むしろ日本企業に数多く存在している「現場の企業家」に注目することが提唱されています。

企業家研究は往々にして偉人にばかり注目しがちになりがちですが、日本の多くの企業には無数の現場の企業家があり、彼らこそがイノベーションで重要な役割を演じてきたという指摘には、あらためて目を見開く思いがいたします。昨今、日本企業の不調が取り沙汰されるたびに、かつて注目されたこうした日本企業の強みの源泉に関する議論が、ややもするとないがしろにされる傾向にありました。私たちが今一度、日本企業の「全員経営」や、その意思決定の主役となる「現場の企業家」に目を向けてみることは、グローバル時代の理想的な企業のあり方、ひいては、資本主義のあり方を考える際にも、きわめて重要なことであると思います。

沢井氏による「私の企業家研究」は、その長年にわたる企業家史研究、経営史研究におけるご経験を惜しげもなく私たちに伝えてくれるものであり、研究の舞台裏をこっそりのぞかせてもらっているような興奮があります。なかでも、沢井氏が約40年前に行った聞き取り調査において、1930年代に大阪市のある工場が、その品質を評価されて東京の機械工場に鋳物のピストンを納入するようになるくだりには、その場に立ち会っているかのような臨場感があります。その他、情報が乏しい場合には、業界雑誌、業界新聞、技術雑誌、学

会誌、『人事興信録』、『日本工業要鑑』が有用だといったアドバイスは、『企業家研究』の読者の皆様が研究を進める際にもたいへん役立つものと思います。

私たちも、「時代や環境に規定され、同時にそれらに風穴を開け、それらを超えようとする企業家の矛盾に満ちた軌跡の意味を探る」試みに、ぜひともチャレンジしていきたいと思います。

第19号からは表紙も一新され、年に2号体制になりましたので、今回のように誌面においても自由な企画の試みができるようになり、また論文掲載の機会も増え、掲載までの時間も短くなりました。今後も『企業家研究』は、企業家史や経営史はもちろん、アントレプレナーシップやスタートアップ、イノベーションに関する研究者の皆様が、これらの領域で業績を上げるための機会を提供いたします。

その際には、通常の「論説」以外にも、「研究ノート」と「ケース資料」というかたちでの投稿も可能であり、これらは、いずれもレフェリー付きの業績となりますので、皆様、ぜひ奮ってご投稿ください。

（編集委員 島本 実）